

## 在家者と信

さきに述べたように教団を示す言葉である僧伽（サンガ）は出家によって構成されていて、在家の信者までは含まれてはいませんでした。しかし、宗教活動として何もしてはいなかったのかということそうではなく僧伽に対する布施をして外護をして支えていたのですから、決して小さな存在ではなかったはずです。そして、部派仏教でも原則としては出家者でなければ得られないとされるに至った阿羅漢果を最初期のうちには在家者でも得ることができるとようになっていたと思われることは前に述べました。ただ、阿含經典はすでに出家者を中心として編集をされているために、在家者は施論、戒論、生天論の三論というように出家者が阿羅漢果を得るという修道のコースとは異なって在家の人々には職業があり、家庭があるので到底専門的な修行は無理なので、もっぱら出家に対する施与をこととして人によっては五戒を守り、天界に生まれることを勧められています。

仏教学者の船橋一哉氏は、ただそれだけではなく在家者にも修道により悟り（如実知見）を得る道（出世間道）が本来は開かれていたはずで、仏教の最後の目的である知慧を得て解脱にいたるとされていたのであり生天を説くのは方便としての世間道であったと述べられています。（論文「原始仏教における出家道と在家道」）

しかし、これもパーリ語聖典や漢訳阿含經の中では殆ど顧みられていない側面で、このような在家者の立場に立った経説は部派仏教の伝承の中には欠落の傾向があり、そのためにこそ大乘經典の価値があるのでしょうか。

ですから、パーリ語聖典に残っている「信」という観念はあくまでも自力的な修行にはいる方便として説かれていることが多いようです。以上の事情を中村元博士（東大名誉教授）は次のように述べています。

”最初期の仏教においては、自分の力に頼って修行するということを教えていたのであるが、しかし自分の力にたよるということをどのようなしかたで実践したらよい

のであろうか？それは指導者の教示によらねばならない。そこで信徒の間では、指導者に対する信頼、師に対する信仰の問題が起ってきた。

最初期の仏教における信仰 (saddhā) とは師に対する帰依信頼であった。信仰は特に強調された。『信とは人にとって第二の自分なのである。』道の人やバラモンを敬う人は『信仰心がある』 (saddha) といわれている。

また相似た語として「帰依」 (saraṇa) という語が用いられ、「帰依するに至る」という表現が、仏教では一つの定型句とされるに至った。ときには「信仰」「清らかな澄んだ心」「帰依」が併拳されていることもあるが。これらは意味合いを異にしながらも、相似た観念なのであろう。

さて、正しい指導者に対する信頼は、仏に対する信頼において極まる。清浄な心をもって仏を礼することが勧められている。

またこれと並んで仏を信頼するという (adhi+語根 muc) という表現ものちに現われるようになった。

『わたし (釈尊) に対する疑惑をなくせよ。バラモンよ。私を信ぜよ。諸のさとりを開いた人にしばしばまみえることは、いともむずかしい。』

そうして、仏に帰依することにより、天の世界に生まれて神々となるということも教えられている。

『仏に帰依するものはみな悪い境地 (悪趣) に赴くことはない。

人身をすてて神々の身体をまどかに得るのである。』

恐らく仏に対する信仰にもとづくのであろう、ある修行者は、アッサタ樹下の青草の上でブツダのことを思い起したという。

このように信仰の独自の意義を強調する傾向はすでに初期の仏教のうちに現われている。

『サンガに対してきよらかな信仰あり、知見がまっすぐであるならば、その人は貧しくないといわれる。その人の生活は空虚ではない。』

『安立せる信仰は楽しい。』・・・・・・・・・・

そこで『いのちある限り不動の信仰』が強調されている。信仰は人に確信を与えるものである。だから『信仰ある人は群れのうちにあつて群れに盲従しない。』

初期の仏教一般としては、信は仏教に入る入口と考えられていたらしい。『信仰によって出家した』という信仰告白がしばしばなされている。最初期の仏教では、信仰によって在家の生活から出て、バラモン教の遍歴遊行者のような出家修行者となるだけであつて、形式のとのつた具足戒を受けることは行われていなかったらしい。”

(以上は中村元選集 13 原始仏教の思想 上 PP.486 ~ 491、一つ一つの経典の典拠を挙げてありますが省略します)

以上のうち、特に最後の部分で出家者といえども最初期には、二百五十戒などという具足戒を受けることはなかったとの記述は注目に値すると思います。ほどなく釈尊の教団の中では出家得度について細かい規則ができて出家は必ず、具足戒を受けるようになり、それが一番の在家との区別となるのですから、その点、最初期の仏教では、あまり出家と在家の距離はなく、偉大な指導者であるみ仏に対する共通の信仰の基盤の上に両者は相互に助け合っていたということになるでしょう。もちろん、外見上は剃髪をして、三衣一鉢〔例外として出家に所有が許されていた僧伽梨(大衣)、鬱多羅僧(上衣)、安陀衣(下衣)の三種の衣と托鉢の時に布施(食物)を受ける一個の鉢(pātra)〕を持ち布施を乞うのですから出家と在家では姿形は大いに異なっていたわけです。

また、「信は仏教に入る入口と考えられていたらしい」とありますが、法華経の中にも「信を以て入ることを得たり」(譬喩品)という御文があり共通しています。これは信というものが仏教の共通の根だったからです。ですから、案外パーリ語聖典中の経文に、今、仏教学などの研究の光を当てられて現われてきた最初期の仏教の精神の中に大乘の精神が汲み取れることもあります。

御祖師様は四信五品抄で「信」あるいは「信心」の強調をされたのはもちろん大乘

仏教の中心である法華經の教えに基づくのですが、現代仏教学の研究によっても、こうして「信」のルーツがある程度分かります。ただ、仏教の大きな流れからいえば「信」ということは釈尊ご在世の時代は自力によって解脱を目指す仏教の表面の太い流れの蔭にあって、地下流のように目だたないもので、それに続く正法、像法の時代には段々にその潮流が大きなものとなり仏教文化の華を咲かせるようになり、さらに末法になっては在家の仏教の実践原理として表面化して自力の仏教にかわって、その位置が逆転するわけです。